

審査委員長講評 渡辺利夫（拓殖大学顧問）

今年の土光杯のテーマは「激変する世界を生き抜く」です。テーマをこのように設定した理由は、世界が激変しており、その中を私どもが生き抜いていかなければならないからです。

ロシアのウクライナ侵攻、中国による日本領土への度重なる侵

犯、北朝鮮の核威嚇、安倍晋三元首相の暗殺。これらのことごとが昨年一年のうちに起こってしまつたのです。臍はそを固めて内外の諸問題を考え、そうしてこの時代を力強く生き抜いていかなければなりません。そう私どもが考えたからこそこの今回のテーマ設定でありま

した。

日本の主権が果たして守られるのでしうか。今日の話の中には主権国家論があり、また北海道危機論がありました。戦争などもうはるか遠い過去のことだと多くの日本人は考えてきました。そんなことはありません。近代に限っても日本は日清戦争、日露戦争、第一次大戦、第二次大戦と、百年ほどの期間にこれだけの対外戦争を経験しながら生き抜いてきました。それではこれからの日本はどうなるのでしょうか。

歴史を学ぶことの重要性が今こそ大きいのではないのでしょうか。マニング・ダニエル・キエロンさんや伊藤渚希君のスピーチはそういう観点に立って、鋭く問題に切り込み大変に心強いものでした。そして、こういう時代であれば

こそ、日本人は日本が日本たることとの由縁である正統的な日本語を守っていかねければならないという、実にユニークで迫力のある小西沙紀さんのスピーチは聴衆の心に深く食い入るものでした。

テーマはさまざまであれ、今日の諸君のスピーチを聞きながら、改めて文章であれスピーチであれ自己を表現することの深い重要性について私は改めて感じさせられました。

表現によって私どもは自分の感じていることを客観的に客観化する、そうして初めてこれをみずからの思想として定着させることができるのです。感じていることと考えていることの言語化がいかに重要であるか、審査委員長の席から諸君の生き生きとした立ち居振る舞いを眺めながら、そう強く感

得させられました。

人生量という言葉はありませぬ、しかし私はあってもいいと思ふのです。一人の人間が生涯を通じてどのくらいの量の人生を送ったのかということ。おそらく人間が一生の間にどのくらいの量の感情を抱いたか。この量が多い人ほどその人生はより豊かなものだと思ふのです。

人生量が感情量によって測られるとすれば、それは文章化された感情表現量によってだと、そう私には思われるのです。今後とも諸兄、感じていることを考えていること、自分の表現に是非努めていって欲しいのです。

土光杯の優勝者はもとより、この大会に今日参加して下さったすべての方々にお礼とお祝いを申し上げます。